

平成 30 年度みきっ子未来応援協議会 家庭・地域・学校教育部会議事録

1 期 日

平成 31 年 1 月 25 日（金） 19:00～20:30

2 場 所

三木市立教育センター 4 階大研修室

3 出席者

(1) 委 員

計倉哲也部会長、門廣文副部会長、百瀬和夫委員、長尾恵猛委員、
高田恭一委員、吉永芳枝委員、岸本久男委員、田中啓規委員
(欠席：坂田尚也委員、西垣幸子委員、金鹿功委員、本岡加代子委員、
浅和直子委員)

(2) 事務局

大東教育センター所長、坂田学校教育課副課長、阿部学校教育課課長補佐、
伊藤学校教育課主査、青田生涯学習課主査、尾島青少年センター指導員、
山城子どもいじめ防止センター長

4 部会長・副部会長紹介

計倉哲也部会長、門廣文副部会長

5 委員自己紹介

6 協議事項

家庭・地域・学校が一体となった人づくりに関すること

(1) 事例及び現状

- ・不登校対策について
- ・青少年の健全育成に係る取組状況
- ・「自由っ子未来塾」について

(2) 意見交換

部会長： さきほど、事務局より説明のあった活動についてのご質問やご
意見をお願いします。

委員： 適応教室の現在の人数は。

事務局： 16名である。

委員： 高校では、学力不振、コミュニケーションがとりにくい等、さまざまな理由で学校へ行きたくてもいけない生徒がいる。スクールカウンセラーが生徒や保護者の話を聞き、対応している。生徒に対する教師の声かけや接し方も大事であるので、教職員は生徒に寄り添えるよう心がけている。

三木市では、I K O K A マニュアルの実践をはじめ、さまざまな取組を行い、よく努力されていると感じる。また、SNS等のネットでのトラブルについては、高校生でも増えている。どこまで規制ができるか課題が多い。生涯学習課の取組は地域に根づいた活動であり、ぜひ他地域でも広げてほしい。

委員： 不登校の子どもたちには、それぞれ個々に原因があるはずだ。具体的な原因を探し、その子にあった対応をしないと解決しない。全体の傾向を分析することも大切であるが、個に応じた接し方が特に大切だと感じる。子どもに寄り添い、理由を早めに聞き、原因を解決することで不登校を防ぐことができると思う。

委員： 青少年補導員を以前に行っていた。地域で様子が随分違う。地域での声かけが特に大切である。保護者が周りや地域に相談できにくい。毎日子どもの登下校にあいさつして、身近な存在として子どもに意識してもらえるように心がけている。地域ぐるみで声かけを継続して行うことが大事だと感じる。

委員： 不登校の定義を知りたい。どういう状況になったら不登校となるか。

事務局： 病気以外の欠席日数が30日以上である。

委員： 音の聴こえ方、目の使い方が原因で、本がうまく読めなかったり、図形の問題が苦手だったりする子どもがいるのを経験してきた。対策として、目の動きを調節する力が運動の中でも養われるため、ブランコ等で、バランス感覚を養うことによって、目の動きがよくなり、本を上手に読むことができることもあった。学習ができにくい理由をそれぞれの個に応じて理由を追求することが大切だと感じた。

家庭で学習に取りくみにくい子どもが、学習ボランティアと一緒に放課後、宿題をすることによって、自信を持って学習できるようになってきたことを他市で聞いた。三木市でも同じような放課後学習をされており、よい取組だと感じた。

委員： 自由が丘地区では、放課後学習のニーズがあったのか。

事務局： 平成30年度から新たな取組として行った。小学生が徒歩で通うことができること、学習ボランティアを集めることができた。条件がそろったので、自由が丘地区で行った。

委員： IKOKAマニュアルは、どういうものか。

事務局： 不登校を未然防止するための教職員向けのマニュアルである。

部会長： 県教委の事業である放課後学習を行っている学校がある。

週2回程度、学習ボランティアが指導をしている。

事務局： 放課後学習は13校で行っている。来年度、拡大していく予定である。

委員： 不登校に対しては、きめ細かい対策がとられている。

人の目の垣根隊として、地域の子どもと一緒に登校している。

現在は不登校の児童生徒がいないが、過去には数名いた。現在、ひきこもりのままの方もいれば、仕事をしている方もいる。

家に閉じこもった方を外出させることは難しい。地域で声をかけることが大切であると感じる。

部会長： 家庭、地域、学校がそれぞれの立場でできることや大切にしていけること、また、どのような役割を担っていけばよいかなどについて、意見や提言を出していただきたい。

委員： 家庭、地域、学校。保護者の不安を解消していくか。困った時に、地域や学校に相談できる環境を整備することが必要だと思う。

部会長： 地域に開かれた学校にしていくことが大事である。

地域での行事に中学生が参加し、地域との接点を増やすことで、あいさつができたり、相談できたりするようになると思う。

未来塾のような場があれば地域に入って行きやすい。

委員： 子どもの目の動きや聴覚に問題があると感じた時は、学校の先生とどのような話をしているか。

委員： 耳が聞こえにくい子どもが、他の子どもの動きを見てから動くので、行動が少し遅れてしまう。先生の指示がわかっていないので、その子の反応を確認して欲しい、ということ先生に伝えた。

委員： 短期記憶に課題があり、一つの指示をようやく聞きとれる子どもに、指導者が一度に複数の指示を出すと混乱する。子どもは、複数の指示を同時に処理することができないので「わかりません。」と答えてしまうようなことが見られる。

このように、困っている子どもは、どんなことで困っているかをうまく説明ができない場合もあることを、指導者が理解しておかなければならない。わからない原因をうまく説明することができない子どもには、関わっている大人が発達や心理の面等、さまざまな角度から考えていく必要がある。

また、保護者は一生懸命子育てをしているのに、子どもにとって良い影響を与えているとは言えない場合もある。例えば、「やっても無駄、どうせ無理。」とあきらめ、積極的にチャレンジしない姿勢を見せる子どもがいる。この場合、保護者が結果や成果だけを褒めているので、子どもはできないと親から認めてもらえない（愛されないのではないかと勘違いしてしまっていることがある。子どもにとって、挑戦して失敗すると認められないのであれば、最初からチャレンジしない方が安全である。

子どもと関わる大人は、子どもの努力している過程をよく観察し褒め、励ましていくことが大切である。多くの大人が子どもの努力の様子をよく見て、「ここ、よく頑張っているね。」と具体的に声をかけ、子ども一人ひとりが自信をもって行動できるように関わっていきたいと思う。

また、学習でつまづいている時、どこでつまづいているのか、その原因は、目（視覚）の問題か耳（聴覚）の問題なのか等、専門的な見地から分析することも非常に大切である。子どもを見る視点を増やすことで、子どもがどこで困っているかがわかることもある。たくさん大人がみんな力で力を合わせてこのような学び

を継続していきたいと思う。

8 閉会あいさつ（副部会長）